

Title	[書評] 莊司格一・清水榮吉・志村良治譯「中國の笑話」 笑海叢珠笑苑千金
Author(s)	興膳, 宏
Citation	中國文學報 (1968), 22: 114-125
Issue Date	1968-04
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/177276">http://dx.doi.org/10.14989/177276</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

方法であると思うが、それならばなぜ現代語を用いられないのだろうか。歌舞伎の雰囲気、文語文の中に、處々古事記的語彙の浮んでいるこの翻譯は、かえつて讀者を混亂させるのではなからうか。

この註釋によつて、博士は從來の數多い杜詩の註釋から一頭地を抜きんでられているばかりでなく、註釋の仕事のあるべき新しい一つの形を示しておられる。しかし何分にも杜甫の全作品の十數分の一の作品、それも今なお完成途上にある作品についての註釋である。初期の作品から博士が形造られた天地を凝視し、イメージの世界を冥搜してゆく杜甫像が、「青白い」秦州雜詩の世界とどのように繋るのか（それが果して單なる杜甫の精神の後退なのかどうか）、更にこうした基礎の上での江南での杜甫の詩の成熟はどのような意味を持つのか、等々について、博士の解釋を早くお聞きしたく思う。なによりも御健康に氣を附けられて、『杜甫』を目にすることのできる日が早からんことを。

（京都大學 小南一郎）

莊司格一・清水榮吉・志村良治譯

『中國の笑話』笑海叢珠  
笑苑千金 筑摩書房

一九六六年一月 三九四頁

笑いは生きものである。國が違えば、笑いもことなり、時代が變れば、笑いも相貌を變えてくる。我々は外國の漫畫を見ていて、しばしばおかしみを理解できぬことがあり、また江戸の滑稽本や川柳・狂歌を讀んでも、もはや現代人の願ねがひをはずさせることのない笑いに氣づくのである。

役人の子はにぎにぎをよく覺え

徳川の世も、宇宙時代とやらの當世のお役人も、しよせん袖の下に弱いという氣質だけは改まらず、その餘慶として、我々はいまだにこの句の耶揄をわがものとすることができる。だが、さて次の句はどうか。

役人の骨つばいはちよき猪牙に乘せ

袖の下では口説き落せぬ難物なら、ままよ次の手、闇にこぎ出す猪牙舟に押し込んで、吉原の色じかけといこうというのだが、吉原が消え猪牙舟が失せた現今、この句の諷

刺は、解説抜きには理解にあまろう。古代中國の笑話についても、時間的にほぼ同じ問題があるほか、風俗習慣の相異というもう一つの厄介な障害が加わる。全く笑いというものも氣樂なものとみではない。しかし考えてみると、失われた笑いの原因を生真面目に講釋してみせるのは、困難さもあることながら、渾沌に七竅を穿つようなある空しさを感じさせるものである。なぜと云つて、笑いは本來直覺的なものであり、それを分析によつて説明してしまえば、語るほどに生き生きとした緊張感は失われて、ただ弛緩した形骸だけが残るにすぎぬからである。もちろん私は、内田道夫教授が本書の序文で説かれるように、中國の笑話を通して「過去の中國の文苑に踏みこみ、その文化や風俗習慣までも理解」できるといふ效用を充分に認める。だがそのためには、譯者も讀者もしばらく寛容の二字を覺悟しておく必要がある。

『中國の笑話』と題される本書は、最も早い時期（譯者によれば宋元のころの成立）の笑話本『笑海叢珠』『笑苑千金』の全譯で、合わせて百四十一篇の小話が収められてい

る。過去に上梓された同類の書がほとんど抄譯であつたのに對して、本書は全ての話を譯出したところにまず特色がある。それは口あたりよく馴じみやすい笑いのみを選別して紹介するのではなく、原書の笑いをそのまま當世に運び來たらねばならぬ作業であり、そこに譯者の苦心のほども察せられる。中國では早く亡び去つてわが國にのみ傳わるこの珍書を、譯者は内閣文庫所藏の寫本を定本として譯出し、卷末には上村幸次氏所藏本油印校本と對校した本文を付録するほか、原文語彙索引・譯文譯注項目索引を併せ付している。特異な口語語彙に富むこの二書を、言語史の資料としても役立てようとした意圖をまたそこに見る。

本書を一瞥した限りでは、なるほど笑話のはしりというだけに、その内容は後世の『笑府』などの小氣味よい洒落なおかしみに較べると、素朴な未完成の味を出ていない。だから抱腹絶倒といった趣きの話はきわめて少なく、笑話愛好家の渴をいやすというにはやや物足らぬかもしれない。中で、現代の我々の感性をもよくくすぐる話といえば、セックスに關する卑猥な話、極端な守銭奴の話、落語の與太

郎を思わせる間抜けの話などが文句なしに多い。その一方で、當時の社會生活（ことに知識人のそれ）に依據した機知的なくすりや、ほとんど我々に通じなくなっている。是非もないというべきか。しかしこうした笑えない笑話とは別に、失禮ながら譯者が笑いのツボをうまく把握していないことから、興味を減殺された話がかなりあるのも事實である。（以下便宜上、本文を先にかかげ、その後に譯文を示す。本文の句讀はすべて譯者による。頁數は譯文の所在を指す。）

食鱸先知（なます）

溫山縣尹病、請醫人卜眞看脉。眞無措。以一貫錢、私禱吏人曰、縣尹未測何患。吏曰、昨晚請李秀才食魚鱸。向夜腹痛。遂見縣尹。切脉既罷。宰曰、何臟所致。眞曰、夜來冷飭傷脾。却伴李來同食。宰公曰、有神見。却是昨晚與李秀才多食了生鱸來。（以下略）

溫山縣の知事が病氣になり、醫者の卜眞をよんで脈をみさせたが、さてこの卜眞、どうしたらよいかわからぬ。そこで下役人に一貫の錢をこつそりやつて、

「知事さまはどんな病氣なんだろう」

「それは昨晚、李秀才をおよびして、なますをたべたんです。そして、夜中に腹痛をおこしたのです」

そこで、知事のところにまかりでて、ていねいに脈をみおえた。知事は、

「どの内臓がわるいのか」

「ゆうべのつめたいなますが、脾臓をわるくしたのです。しかも李といつしよにたべましたでしょう」

「まつたくよく見通すものだ。だが、昨夜は李秀才となんだよ、生のなますをたべすぎたのは」（六一頁）

このあと、譯者はさらに注を施して、「卜眞のききちがえ（李秀才と李）を、知事にいうと、知事がそれを訂正するところにおかしみがある」と説明している。だが、實のところ、「おかしみ」はそんなところにはないのだ。卜眞が李秀才を李と聞きちがえて、なますを李といつしよに食つたのだろうと得意げに診斷を下すと、それをまた知事が勘ちがいして、「さてもお見通し、まさしく昨夜は李秀才といつしよになますを食いすぎたわい」と、卜眞の見立ての正確さに舌を巻くという二重の聞きちがいにこそ、「おか

しみ」はある。この知事のことばは、いわば落語のサゲにあたる部分であり、譯文はサゲをうまくおさめることができなかったために、元來のすつとばけた笑いの妙味を殺してしまつた。題名にある「先知」とは、李秀才との一事を醫者にうまくいいあてられたことに對する知事の賛嘆を示しているのだ。誤譯の根源は、かかつて知事のことばの中の「却是」を、「だが」という屈折の方向に解したことにある。しかし、この「却是」は、「正是」の意味でなければならない。またこの語が實際しばしば「正是」の方向に用いられることは、張相氏の『詩詞曲語辭匯釋』（中華書局一九五三年）などがつとにいくつかの用例を引きつつ實證している。

次の例も、やはり不周到な譯によつて、笑いが薄められてしまつたものである。引用するにはいささか品のない話だが、ごかんべん願うことにする。

#### 男作女工（おかま）

有一富家子、因在京遇元宵、出街看灯。不覺行入一瓦子内。忽有一美貌少年、道粧向前請吃茶。富家子與之素

書評

不相識、不甚答之。却不知乃不男之作。其少年者再三近前曰、我是男作女工。富家子不曉其義、應之曰、你是男作女工。莫是裁縫待詔。

ある金持ちの息子、みやこにいて、ちようど元宵のまつりの日、まちに出て、提灯をながめているうちに、おもわずしらず、妓院の中にはいりこんでしまつた。

一人の美しいお小姓が化粧をして、近づいてくると、「お茶をのませてください。」

金持ちの息子は、もともと知り合いの仲でもなし、なんともこたえずにいた。もちろん、どうして男のみなりをしないのかも知らない。その少年がなんとも近くによつてきては、

「わたしは女の仕事（おかま）をするのですよ」

というのだが、金持ちの息子、その意味がわからず、

「おまえは、女の仕事をすると、まさか、男のお針子じゃないだろうね」（八八頁・傍點筆者）

落語「明烏」<sup>あけがらす</sup>の若旦那登樓の圖を思わせるような話だが、蔭間の少年が客にむかつて「お茶をのませてください」と

頼む「請吃茶」の譯は、なんともいただけない。<sup>注</sup>客のテールに群がって酒をせびるバーのホステスでもあるまいに。問題の個所を、私の調子に直して譯すと、いちおう次のようになる。

……。と、一人の美しい若衆が、道士のなりをして進み出ると、お茶をどうぞとすすめる。金持ちの若旦那は、もともと知つた仲でもないから、しかと相手にもならず、これが蔭間をやろうとは知りもせぬ。その若衆、再三にじり寄つて、

「わたくし、男で女のわざをいたします」

若旦那、その意味がわからず、

「おまえは男で女のわざをするつて、じゃあお針子なのかい。」

紙幅の都合で、いちいち全文を引用しているわけにはいかないから、以下しばらく問題の個所だけを引くことにする。准折學錢（月謝の割引き）という話（三四頁）、家庭教師の誤讀の多さに業をにやした主人が、一字誤るたびに一月分の謝禮を差し引くことにした。年末になつて勘定してみ

ると、二か月分しか残つていないので、その旨告げると先生仰天して、「是何言興、是何言興」と慨嘆して、いつべんに二字のまちがいを犯す。

主人揖之曰、且得兩无少欠。謂其以兩個言興字、皆作興字讀也。

あるじ、かるくおじぎして、

「のこりの二ヶ月分もなくなりました。というのは、ふたつとも興（な）をおつしやいますか」とよむべき字を、興という字によまれたからです」

主人のことばは、「且得兩、无少欠」と讀を入れるべきであろう。欠は、二字に伸ばせば欠賑つまり借金の意味で、六字の意は、「さて二か月分もいただき、借りはさつぱりとなしだよ」ということになる。さて、次の謂から也までの文は、おそらく主人のことばではなく、著者が讀者に向けて施した説明、いいかえれば種明かしの部分である。だいいち「謂……也」という構文がすでに解説のための文體であり、さらに笑話としてのおかしみからいうなら、主人がわざわざ自分の行爲に注釋を加えたのでは、笑いはひど

くふやけたものになつてしまふ。先生の誤りに間髪を入れず、「且得兩、无少欠」と早いテンポの會話でたみこんで、あとは讀者に種明かしをしてみせる、そこにこの話の機知があるのだ。句讀の誤りによつて、意味が不明瞭になつてゐる話はこの他にもかなりある。一つだけ例をあげる

と、動風酒令（「動風」の酒令・三七頁）の句讀は、「蒼蓬波稜都是賣賣了、波稜蒼蓬在」となつてゐるが、これでは賣と在で韻を踏んでゐる意味がなくなるわけで、正しくは「蒼蓬波稜都是賣、賣了波稜蒼蓬在」とせねばならぬ。句點と讀點の區別のあいまいさに至つては、さらにその數が多いが、あまり煩瑣にわたるのでここでは論を控える。

次は謾弄兩家（なこうど口）の話（九一頁）。せむしの男とみつくちの娘を緣組みさせようとする仲人があつて――

一日媒人謂男家曰、女子甚好。只是有些口破。其人曰、口破不過好胡言亂語。我家無醜惡事。儘教口破。

ある日、仲人が男に、

「とてもいい娘がいるんだ。ただ、ちよつと口がわるいがね」

「口がわるいつて、でも、思ひのまま、出まかせをいうだけだからな。わたしの家もえげつないことはないが、口はわるいよ」（傍點筆者）

「口がわるい」に肉體的缺陷を含ませた手ぎわは上として、「我家」以下の譯文は全く意味をなさない。「儘教」の二字は、漢文訓讀の調子なら「さもあらばあれ」と讀むところであり、かくて譯文は次のようなことになるだろう。「わたしの家にうしろ暗いことはないから、せいぜい惡口を叩いたらいいさ。」なお念のため注文をつければ、仲人（媒人）とは、我々の風俗に生きている月下氷人ではなく、白話小説にしばしば登場する例の海千山千のばあさんを連想すべきであること、一言注記して時代背景を知る手引きとすべきではなかつたらうか。

田秀才嘲姑詩（けちなお婆）の話（一二六頁）では、三十三數年ぶりに訪問したお婆があまりにもけちんぼうなので、怒つた秀才が非難の詩を叩きつけ席をけつて去るといふ筋書きである。お婆の吝嗇ぶりときたら、飯のおかずにも魚一匹なく、いけしやあしやあとこういう始末だ。「莫怪池中

「无魚」。ところでこの譯の「池に魚もないのか、などと思わぬでね」(傍點筆者)は、どうみても語學的な誤りである。「莫怪」は、やはり「無怪」と同じく、「何も無理はない」の意として譯出するのが自然であろう。そのあと秀才の書きつけた七律の中に、「下飯還稱池沒魚」(食事を出せば池に魚なしという)の一句があることを思うと、原譯はいづつその狀況に適合しにくからう。また詩の最後の二句「聊吟八句相辭去。這樣親姑何似無。」の譯は、「やおら吟じ終ると、すたすたと出ていった。こんなお婆はいないのも同然だ。」(傍點筆者)となつていて、詩の一部としてでなく地の文として譯出されたのではないかという不安を抱く(七・八句の切れ目が讀點でなく、句點になつて注に注意)。「聊か八句を吟じて相い辭し去らん」——秀才の決然たる意志をここで表出しないう限り、笑いは完結しないのだ。この類の誤解はまだまだあるが、長くなるのでこの邊で打ち切りとする。

このあたりで、少し性質のことなつた笑いの喪失をとりあげることにしよう。

### 蘇武寄書(蘇武の手紙)

昔漢武帝與東方朔同在上林苑。忽見群鴈遠來。初排成天字、又轉成下字。未幾又轉成二字。又成人字。飛來漸近。武帝取弓射之。一鴈應弦、自空而落。取而視之、乃有蘇武自北地寄書、係在脚上。東方朔笑曰、此鳥會寄書、所以曉得寫字。

むかし、漢の武帝と東方朔が上林苑にいと、たくさん雁がはるかむこうからやつてくるのが見える。

はじめならんだら、天という文字になり、つぎには下という文字にかわり、しばらくもなくまた一字、こんどは人という文字になつた。

だんだん近くとんできたので、武帝は弓をとつて射かけると、一羽の雁がたちまち矢にあたっておちてきた。とつてみると、蘇武が北方の地からよせた手紙がむすびつけてあつた。東方朔、笑つて、

「この鳥はつけ文(が)を知つてゐる。だから、字もかけるんだな」(八六頁)

私はこれを誤譯だといつてもいい。しかし譯者が感



じとられたこの話のおかしみ、つまり雁が「つけ文」をするということは、どうも話の作者の意圖とはズレがあるように思われるのである。

あらたまの年のはじめの福壽草祿といふ字はその中にあり。蜀山人の戯れ歌を氣取つていうなら、話の謎をとく鍵もまたその中にある。雁の群れが描いた四文字を排列すると、「天下一人」となる。この四文字、ゆめゆるがせにすべきではない。「天下一人」が皇帝を指すことばであること、たとえば『禮記』玉藻に、『自ら天子を稱して予一人と曰う』とあり、また『尚書』太甲下の「一人元良、萬邦以貞」の疏には、「天子を謂いて一人と爲す者は、其の義に二有り。一は則ち天子自ら一人と稱す、是れ謙辭と爲す。己れは是れ人中の一のみなるを言う。一は則ち臣下の天子を謂いて一人と爲す、是れ尊稱と爲す。天下に惟だ一人のみなるを言う」とある。すなわち知る、雁の群れは蘇武に託された手紙が武帝あてであることを、空中に文字を描いて知らせていたわけなのだ。とわかれば、蘇武が武帝に「つけ文」をするというのも變だろう。「蘇武自北地寄書」

書評

と「此鳥會寄書」の「寄書」は、同質の語としてさしつかえあるまい。また鳥 hino の語に、男根を意味する diao がかけてあるとする注も、この場合は穿ちすぎである。笑話だからといつて、何も常に卑猥さを隣合わせに置いて考える必要はないのである。

解杜詩嘲妓（杜甫の詩のいみ）という話（二八九頁）も、古典の教養を必要とする點で蘇武の話に一脈通ずる厄介な内容である。ある人が青樓に遊んだが、遊女のもてなしの惡さに憤慨し、杜甫の「螢火」の詩一首を壁に書きつけたち去る。のち一人の秀才がこれを見て、くだんの遊女にむかい詩に託された非難を一句ごとに説き明かしてみせるのだが、五律「螢火」の最初の聯は――

幸因腐草出

ほたるは幸いに腐草をたよりに生まれ

敢近太陽輝

太陽に近づいて輝くことなど、うしてで

きよう（傍點筆者）

この二句について秀才がつけた解釋は――

第一句は濫物。第二句は愛日。

第一句は、だらしなくちらかつてゐること。第二句、

月を愛すること。

ところで螢という蟲は、我々には一種のロマンティックな連想を伴う存在かもしれないが、古代中國人の心には、腐草が變じて生み出された蟲という素性賤しき奇怪な存在として映つたことを心に留めておかねばならない。中唐の鬼才李賀の詩は、そうした印象を利用して、異常な雰圍氣を現出する効果をあげている。だから第一句を解いた「濫物」も、「だらしなくちらかつている」というようなことではなく、遊女的人格そのものを卑しめた罵語（文字づからすれば淫、賈とでもいうような）でなくてはなるまい。朱鶴齡・仇兆鰲ら清人の舊注が、腐草は腐刑の人の比喻であるとして、この詩を宦官に對する非難を寓した作品と解することも思ひあわせる必要がある。さて第二句の解釋「愛日」の譯が「月を愛すること」とあるのも當を得ない。譯者も注している通り、「敢近太陽輝」を、杜甫の原詩では「敢近太陽飛」に作り、「敢えて太陽に近づきて飛ばんや」と反語に訓ずるのが普通である。しかしこの話の秀才は、この句の意を「愛日」（日を愛する）と解しているからには、おそ

らく反語として讀まず、「敢えて太陽に近づきて輝く」あるいは「敢えて太陽の輝きに近づく」と肯定形に讀んだものにちがいない。「愛日」とはこの場合一種の隱語なのだろうが、「太陽」の陽が男性の象徴とすれば、「男狂い」とでもいうことか。いずれにしても、これこそもつとえげつない想像をめぐらしてもよいところである。

次に注釋について少し述べてみたい。先にもいつた通り、笑いを分析的にかみくだいてしまうことはそつけない話だが、ものによつては、ほんの少し有効な解説を加えるだけで笑いが生き返つてくる場合がある。たとえば落語のくもわばなし廊話には、すでに亡びてしまつた遊廓を垣間見た經驗のない者には、理解に苦しむ話が多いが、嘶家がほんの少しばかり説明的なまくらをふるることによつて、客の笑いを爆發させることができる。本書でも時代背景となつた風俗上の問題については、つとめて笑いの手引きとなる説明を施す配慮がなされており、それはそれで成功している場合もあるが、ここでは例によつて私のあこぎな注文の方を優先させることにする。

まず誤つた注釋について。孟縣尉與妻詩（三十年前二十三）の話（二八頁）で、「西京」を注して、「唐代では、洛陽・鳳翔・長安などをさし、……」とある。この後に譯者も記される通り、宋代では西京といえは確かに洛陽を指したが、唐代では長安以外には考えられないはずである。肅宗の行在のあつた鳳翔をぜつたいに「西京」といわなかつたとしてはゆきすぎかもしれないが、注としては單に長安の別稱としておいて何ら問題はないであらう。

摩耶夫人（邦譯も同題）の話（二六二頁）では、この話の主人公陳蕃の名に注して、「後漢書九六、陳書二八に傳がみえる」とあるが、八百年の長壽を保つたというかの彭祖でもない限り、後漢の人が六朝最後の王朝である陳まで生きていたはずがない。これは後漢の陳蕃なのであつて、陳の諸王の一人陳蕃は全くの別人である。ついでにいえば、彼の上奏文の出所を『資治通鑑』や『漢紀』（後漢紀の誤り）とするのは、不都合とはいえないまでも、やはり『後漢書』の本傳をあげるのが穩當であらう。これらはいわばなくもがなな解説であり、他にも散見するが以下省略に委ねる。

書評

今度は、ぜひ注釋を施してほしかつた例を二三取りあげてみる。東坡敍宗（東坡の親戚・一一六頁）は、蘇軾が自分の姓を蘇そとも蘇そとも書くことをとらえて客をからかう話だが、蘇の字は蘇にも作るという知識は、おそらく現代の讀者一般のものではない。

教兒對句（乞食の子は乞食・一五〇頁）は、金持ちが乞食の子を育て、家庭教師をつけて對句の練習をさせるが、乞食の素性まるだしの句を作るといってお笑い。對句の練習は、詩作の前段階として封建時代の知識人には必須のものであり、一字の對からはじめて、次第に長い句の對を作る練習に及んだという説明は、この際缺かしてはなるまい。

解開葫蘆（ハゲ頭・一五九頁）は、嫁が、しゅうとのはげ頭を葫蘆ひょうたんに見たてた詩を作り、その意味を解けといわれると、「もし解いたらたいへん、ひようたんがわれて、ひしやくになりますもの」と逃げる話。ただし、この葫蘆ははげ頭の意を寓するだけでなく、「悶葫蘆」（むつかしい謎）の意を同時にかけたものにちがひなく、「ひようたんは解けない」は、「この謎は解けない」のかけことばになつて

いる。これも一言説明がほしいところ。

最後に、類似説話および江戸小咄との關係について。譯者は、各笑話のあとに、他の笑話本や江戸小咄に見られる類似の話の題名を、時として全文の引用を交えながら、たんに紹介している。ことに江戸小咄との關係がこうした作業によつて少しづつ説きほぐされてゆくなら、日中笑いの交流の過程も明らかにされ、古典落語の源流究明にも役立つはずである。ただし、類似の話として認める原則は、素材の一致とともに、プロットの一致ないしは近似といふかんどころが必ず押えられねばならぬ。その點「同一のモチーフをもつものは、すべて類似説話として収録した」という譯者の原則には問題がある。たとえば火居道士（女房の尻・五六頁）のあとには、江戸小咄の類似説話として、「尻についてたくさんある」と前置きして多くの話の名があげられ、患重不醫（どけち・六九頁）先生嘲東人詩（家庭教師・一二八頁）では、けちんぼをテーマとする話が列擧されている。しかし、これらはおおむね尻や吝嗇という素材の一致があるだけで、プロットの「類似」はみられない。

尻や吝嗇といへば、笑いのタネとして横綱格の存在であり、千種以上もあるという江戸の笑話本から、いちいちこれらに關した話をあげていたら、いつたいどれだけの數に上るか見當もつかぬほどだし、また笑話の研究にもほとんど裨益するところはない。譯者は武藤禎夫氏の『江戸小咄辭典』（東京堂・一九六五年）に刺激を受けた由であるが、同書のいわゆる類話の選定は、私が先にあげた二點を嚴格に貫いていることに注意されたい。

『笑海珠叢』『笑苑千金』二書の古拙な笑いは、いろいろ不滿はあつても、捨て難い味を持つている。「絲麻有りと雖も、菅<sup>かんか</sup>削<sup>さく</sup>を棄つる無かれ」という『文心雕龍』諸體篇のことばを、私はそのまま二書の評價に呈してもよい。三人の譯者がその笑いと誠實に取り組まれた努力に對して、私は好感を抱くし、また心から敬意を表したいと思う。だがあえてもう一言妄言を吐くなら、あとがきなどからみても、譯者の興味はどちらかといへば語學的な面に傾き、民衆から生まれた笑いをもう一度民衆にかえしてゆこうとする熱意は弱いように感じられる。卷末の詳細な語彙索引は、

中國語學・文學の研究者にとつて一定の價值を有する成果であると同時に、笑いの享受者である民衆には、いささかとりすましたご大家の令嬢のような印象を與えるのではあるまいか。これは譯者に對する批判というより、むしろ私を含めた研究者の自戒というほうがふさわしい。「ムム笑話か、笑話は漢が面白い。……イヤどうも漢は違つたものだ。あの趣向をきやつ等に教へてやりたい。」したり顔する『浮世床』の孔蕢先生は、我々にとつて決して他人ごとにはなつていないのである。

注 『通俗編』の引く『老學庵筆記』によれば、女性が婚約することを吃茶という由である。蔭間の「請吃茶」ということは、あるいは性倒錯的なおかしみを含むのかもしれない。

(愛知教育大學 興膳 宏)